

Title	哲学第126集編集後記; 2010年度三田哲学会編集委員; 2010年度三田哲学会役員
Sub Title	
Author	真壁, 宏幹(Makabe, Hiromoto)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2011
Jtitle	哲學 No.126 (2011. 3) ,p.163- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000126-0163">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000126-0163</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

今号は6本の論文を掲載することができた。哲学から3本、倫理学から1本、教育学から2本である。いずれも査読を経た投稿論文で、主として博士課程の院生と若手研究者のものだ。これ自体はもちろん喜ぶべきことである。しかし、今回、専任教員の投稿がなかったことに対しては若干複雑な思いでいる。『哲学』の編集に携わる前はあまり意識したことはなかったが、この雑誌は元々「紀要」ではなく、文学部哲学系と人間関係学系の諸専攻の教員が研究発表する場だったからである。もちろん、投稿は会員に広く開放されているし、院生は研究業績を

積み重ねば博士論文の提出や研究職への就職が年々難しくなっていることは理解しているつもりである。また、繰り返すが、若手の論文が多いこと自体は学会の活性化という観点からもよいことだと思う。しかし、編集幹事としては、『哲学』の元々の性格を忘れないことも重要だと思う。分野的にももう少しバランスのよい内容に努力すべきだったとも思う。編集幹事として努力不足を痛感する次第である。来年度は、この反省をいかして『哲学』の充実化を図っていききたい。

(眞壁宏幹)

### 2010年度三田哲学会編集委員

齋 藤 慶 典 (哲学)  
 柘 植 尚 則 (倫理学)  
 大 石 昌 史 (美学美術史学)  
 鈴 木 正 崇 (社会学)  
 大 森 貴 秀 (心理学)  
 眞 壁 宏 幹 (教育学)  
 宮 坂 敬 造 (人間科学)

### 2010年度三田哲学会役員

会 長	樽 井 正 義
会 計 監 査	坂 上 貴 之
幹 事 長	西 脇 与 作
幹 事 (庶務)	柘 植 尚 則
幹 事 (編集)	眞 壁 宏 幹
幹 事 (会計)	岡 原 正 幸
幹 事 (記念事業)	大 石 昌 史